歴史地震
第 21 号(2006) 219-222 頁
受付日 2006/1/4, 受理日 2006/3/6

小藤論文の濃尾地震根尾谷断層写真について

信州大学大学院 総合工学研究科* 榎本 祐嗣

On the photograph of Neodani fault during Nobi earthquake appeared in Koto's article

Yuji ENOMOTO

Graduate school of Science and Technology, Shinshu University
15-1 Tokida 3-chome, Ueda, Nagano 386-8567 Japan

§1. はじめに

明治 24 年(1891)10 月 28 日に発生した M8.0 の濃尾地震に関する書籍，新聞や写真などの文献資料は，昭和 53 年(1978)愛知県防災会議地震部会発刊の調査資料『明治 24 年 10 月 28 日濃尾地震文献目録』にまとめられている．国内最大級の濃尾地震の発生が写真技術の普及した頃にあたり，写真師たちが数多くの被害写真を残したことの意義は大きい．代表的な写真が**図1**の小藤文次郎の論文で紹介された根尾谷水鳥の大断層崖である[Koto(1893)]．この写真が撮られた経緯などは上述の調査資料では明確でないので，小稿で，この部分に関して『濃尾地震文献目録』を補足しておきたい．

§2. 小藤の調査行と断層写真撮影の経緯

地質学者小藤文次郎は明治 22 年(1889)7 月 28 日夜の熊本地震(M6.3)の際に，「小生その際九州地方地質調査のため出張中にて，偶々大分県臼杵町にありて其の震を感ず．」二日を経て漸く其報に接し熊本県に赴けり，着熊後実践するに該市の西なる金峰山中に三線あるを発見せり．」この調査から地震断層に関心をもった小藤は，明治 24 年(1891)10 月 28 日の濃尾地震に際して，岐阜測候所長井口龍太郎の 11 月 7 日付号外「官報」掲載の「震原実査復命」の内容を知って，11 月 14 日頃に東京をたち根尾谷に直行した．

根尾谷での行動については，中村(1943)に詳しい．「(田中館先生は)十一月十二日東京を出発された．汽車で名古屋まで行きそれから人力車を雇って岐阜を経て根尾谷に入り，震源地に近い一寒村金原に午後九時過ぎに着し，崩壊した寺の本堂を取片付けた跡の明地にテントを張って直に天測を始められた．…翌日先生は“一人で観察して来るから”と言って地磁気の観測は学生に命じて出かけられたが，実に之がかの有名な根尾谷大断層の発見となったのである．当時此地方に出張していた地質学の小藤文次郎教授が能郷村で先生と会し『写真師が後から来るから宜しく指図して取らして呉れ給へ』と依頼された．先生は対崖の高地に登り写真師には此所に来て取れを位置を指図し自らカメラを覗いて之を撮影させられた．」

「(田中館は)学生四名を引率し，十三日夜愛知県より来岐し昨十四日早朝本縣に出頭し直ちに根尾谷長嶺村へ赴きたる」[岐阜日日新聞(1891)]との記事がある．それゆえ，現地に到着して早速天測を開始したのが 14 日夜，田中館が小藤と出会ったのが明くる 15 日になる．根尾谷の大断層写真には，道を歩く人影が右の大きく延びているから，現地の状況から判断すると朝 8 時過ぎにあたる．したがって翌 16 日早朝に撮影されたということになる．

§3. Milne の写真帖にある根尾谷断層写真

Milne と Burton，小川一真らの調査行は，「理学士大森房吉氏は鉄道廠の依頼に応じミルン教授と同行にて二十九日の夜被害地へ出張せり」[東京日日新聞(1891)]，また「○井上勝氏鉄道庁長官 井上勝氏は同庁雇ゼーシルン(ママ)氏と共に鉄道線路巡視として派出の途次一昨夜来名，栄町の秋琴楼へ投宿」[扶桑新聞 (1891)]とある．彼らは鉄道廠からの依頼を受け，震後ただちに鉄路に沿って震害調査を実施した．Milne ら写真帖[Milne et al.(1892)]に所収される濃尾震災の写真 32 枚の約 1/3 にあたる 10 枚が鉄路や鉄橋の損壊写真であるのは，鉄道廠の依頼を受けた任務ゆえであろう．彼らの調査はまだ井口龍太郎の官報報告にある根尾谷の情報を知らないうちに行われたものであり、また旅館泊まりの調査ではと

* 〒386-0017 長野県上田市踏入 2-16-25-2

図1　Koto(1893)論文に掲載の根尾谷断層写真

図2　長崎大学図書館に所蔵の根尾谷断層写真（彩色されている）

ても根尾谷まで足を伸ばせるはずはないと思えるが，根尾谷断層の写真は，この写真帖第2版にも所収されていている．これには plated by K.Ogawa と記されているから，Milne らに同行した東京の写真技師小川一真が撮ったものと思われていたふしがある[橋本(1992)]．一方で最近，岐阜の写真師　瀬古安太郎が撮影したのではないか，との説も出ている[村松(2002)]．

根尾谷断層写真を撮影したのが誰かという謎を解く鍵が，Milne らの写真帖にある．写真帖の第1版

[Milne et al.(1892)]には，小藤論文と同じ根尾谷断層写真は所収されていない．第 2 版[Milne et al.(1894？)]に載せられている．いずれの版にも発行年月の記載がないが，小川同窓会『創業三十年紀年誌』[小川写真製版所(1928)]に「同年（明治二十四年）十月，尾濃に地大に震ふ，帝国大学教授ミルン氏及バルトン氏相携へて震災地に向ふ，先生亦随伴して災害地を歴順し，惨憺たる光景を撮影して余す所なし，還りて後ち悉くこれを写真版に附し，歳を超て其帖成る，其地震学に貢献したる所の功，決して甚少となさず．」したがって第 1 版は明治 25 年になって発刊された．事実，国会図書館が所蔵する第 1 版に，明治 25 年(1892)1 月 23 日受付印がある．では第 2 版は何時発刊されたか？国会図書館にある第 2 版は昭和 46 年(1971)9 月 4 日の受付けである．誰かが寄贈したものであろうが，この図書カードには発刊は”1894 年（？）”とのメモ書きがある．これが正しいとすると，小藤論文(1893)の1年後で，論文発表を待って第 2 版が出版されたことになる．

この写真帖は，すべてバルトンと小川が撮影した写真から構成されてはいない．第2版のPREFACEには，S.Aoyama とK.Kimbeiの名が謝辞に加えられている．Kimbeiとは，当時金幣写真館の名称で横浜に店を構えていた日下部金兵衛のことである．この PREFACE には引用した金兵衛の写真の番号を XXI と記載しているが，XXI の写真はすでに第1版にある．したがって，これは根尾谷大断層の写真番号 XX の校正ミスと判断できる．

§4. 日下部金兵衛の濃尾地震被害写真

4.1 長崎大学図書館所蔵資料

長崎大学図書館のホームページに，日下部金兵衛のアルバムのなかに収められている明治二十四年十月二十八日濃尾大地震の根尾谷大断層の彩色写真の**図2**が掲載されている．小藤論文の写真と全く同じ構図であるが背景の山並みが小藤論文の写真よりもかなり鮮明であることから，小藤論文や Milne の写真帖の根尾谷断層写真は金兵衛の原板をもとに小川一真が複写したものと考えられる．この金兵衛の濃尾大地震のアルバムは，海外へのお土産用として彩色されたもので，英文タイプの説明がつけられている．

4.2 日本大学芸術学部所蔵資料

岐阜新聞の 10 月 27 日付に，「濃尾大震災の未発掘写真が日本大学芸術学部所蔵の『濃尾大地震写真集』に多数収録されていることが，二十七日までに遠藤正治非常勤講師(64)＝岐阜市光栄町＝らの研究グループ（代表・高橋則英日本大学教授）の調査でわかった．同写真集は，名古屋市とその近郊の震災の様子八枚と，岐阜市と羽島郡笠松町など近郊を写した四枚，計十二枚をセットにした彩色紙焼き写真．(中略)日本大の写真はこれらのどれとも異なり，既知のものと重ならない未発掘の写真と分かった．撮影者は不明．」との記事があるが，日下部金兵衛のものである可能性がある．

4.3 横浜開港資料館所蔵資料

横浜開港資料館にも日下部金兵衛の彩色幻灯写真が 27 枚所蔵されている．そのうちの 8 枚は「濃尾大地震写真」として『明治の日本』[有隣堂(2000)]に採録されている．

§5. おわりに

日下部金兵衛は，幕末に来日し横浜に写真館を構えたイギリス人カメラマンのＦ．ベアトに師事し，最初写真の彩色に従事し腕をあげた．明治 14 年（1881）頃に独立して金幣写真館を開業し，‘横浜写真’の主流をなす鮮明で彩色にすぐれた記録写真を多くの残した[横浜開港資料館編，明治の日本，2000]．

金兵衛が濃尾地震被害の撮影に赴いたという直接の記録は見出していないが、本稿の考察から濃尾地震の被害の撮影に活躍した写真師の一人であると思われる．その彩色写真は現地を見たうえでの技巧で原資料としての意義がある．

引用・参考文献

小川同窓会,1928,創業三十年紀年誌,(小川写真製版所,(横浜開港資料館所蔵).

岐阜日日新聞，明治 24 年(1891)11 月 15 日付.

岐阜新聞，2004.濃尾大震災の未発掘写真が日本大学芸術学部所蔵の『濃尾大地震写真集』に.

Koto, B., 1893, On the cause of the great earthquake in central Japan, J. Coll. of Sci. Imp. Univ. Tokyo, 5 295-353.

東京日日新聞，明治 24 年(1891)11 月 1 日付.

橋本万平,1992,素人学者の古書探求,東京堂出版,pp144-150.

中村清二，1943，田中館愛橘先生，中央公論社 p96.

長崎大学図書館のホームページ,古写真博物館,

(http://www.lb.nagasaki-u.ac.jp/old_pic/exp/66.html)
扶桑新聞, 明治 24 年(1891)11 月 1 日付.
Milne, J. et al., 1892, Great Earthquake of Japan 1981, 1st ed.; 1894?, *ibid,* 2nd ed.
村松郁栄,2002,濃尾地震と根尾谷断層帯,古今書院,pp48-49.
横浜開港資料館,2000,明治の日本,有隣堂,pp118-119.